カバーグラスの下の生き物達

大久保　泰和

きのこの細部を見るためには顕微鏡が不可欠です。きのこの菌糸などを観察するには、スライドグラスに試料を載せカバーグラスで水封します。封水中には目的の胞子や菌糸が見えるのですが、しばしば意外な生き物が、まれに生きた状態で観察されることがあります。以下は、この数年間に顕微鏡下に現れた生き物達を紹介させていただきます。

写真番号に＊を付けた写真のスケールは１目盛４㎛です。他はすべて１目盛10㎛です。

（1）植物

写真１：緑藻と呼ばれている植物で、ウズラタケ(写真２)をカバーグラスに伏せて胞子を採取した時に落ちてきたものです(目的の胞子は落ちませんでした)。硬質菌の傘表皮によく見られます。

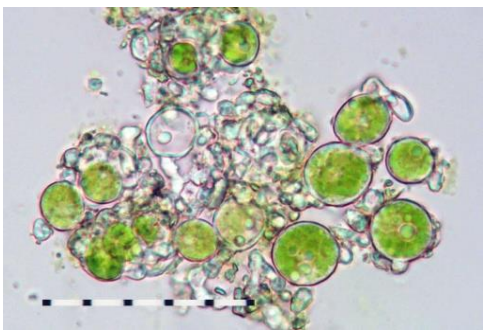

写真１　緑藻の仲間

写真２　ウズラタケ

写真３：シロキツネノサカズキ(写真４)の椀の中に住んでいた珪藻の仲間です。似たような形の珪藻を近くに並べてあります。珪藻は、単細胞生物で、一組の合わせたシャーレのような殻を持っているそうです。

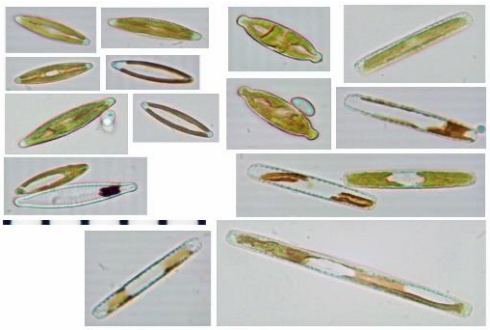

写真３　珪藻の仲間-1

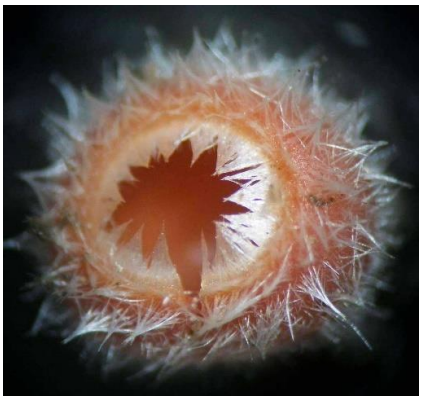

写真４　シロキツネノサカズキ

写真５：カンムリタケの柄に絡まった菌糸の中にいた珪藻です。こちらは内部の詳細な構造まで観察することができました。

写真５　珪藻の仲間-2

写真６：緑色なので植物だろうと思いますが、ミカヅキモという仲間に形が似ています。微小な子嚢菌の胞子とともに観察されました。

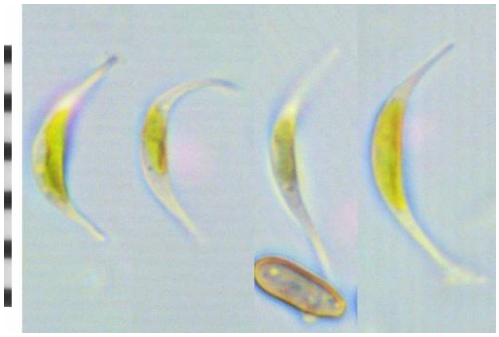

写真６＊　ミカヅキモ？

（2）動物

写真７：アラゲコベニチャワンタケの仲間の子実体上にカバーグラスを置いて胞子を採取した際、線虫の仲間が生きた状態で紛れ込んでいました。体長は１㎜を超えます。体をくねらせるようすは、非常に不気味。「きのこと動物(相良直彦 築地書館 1989 年)」には、菌食する線虫がいること、ヒラタケの仲間が線虫を殺して食うことが書かれています。

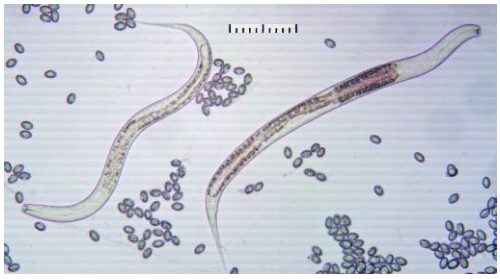

写真７　線虫の仲間

写真８：ウラベニガサ属(写真９)の傘表面にあったもので、何者か見当が付きません。長い針状の毛と左側表面に微毛が生えています。節足動物の一部のように見えます。

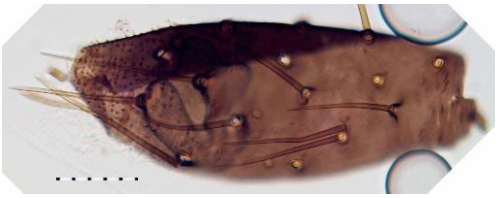

写真８　節足動物の一部？

写真９　ウラベニガサ属のきのこ

写真 10：短い毛に被われた昆虫の触角のようなものです。正体不明です。微小な子嚢菌の周辺にあったようです。

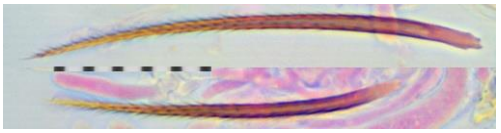

写真 10＊　微毛の生えたひげ状のもの

写真 11：シロキツネノサカズキの椀の中から出てきた多分ウサギワムシというプランクトンです。尾のようなものが付いています。多少押しつぶされています。

写真 11　ウサギワムシ

写真 12：コテングタケモドキの胞子と一緒に落ちてきたもので、チョウかガの鱗粉だということです。似たようなものは何度か観察しています。

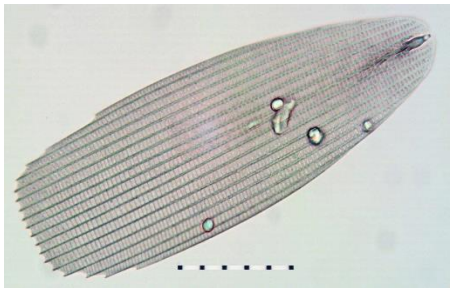

写真 12　チョウかガの鱗粉

写真 13：地上に群生したコマ型子嚢菌の胞子とともに観察されたダニの仲間です。カバーグラス下で圧死したと思しく、体長は 100 ㎛強、体節や脚の爪まで克明に見ることができます。

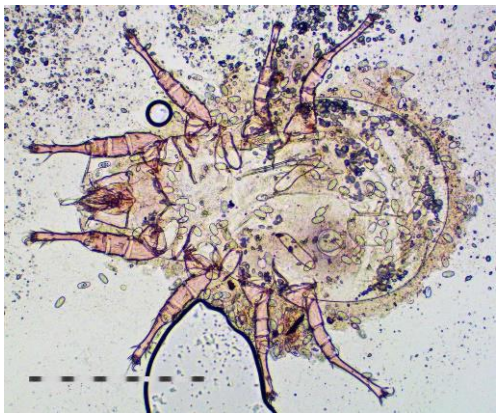

写真 13　ダニの仲間

（3）きのこ以外？の胞子

写真 14：ウラベニホテイシメジのひだに紛れ込んでいた、星形の胞子です。多数の隔壁があります。これも多分子嚢菌の胞子であろうと思われますが、このような面白い形状の胞子を作る菌を観察してみたくなります。

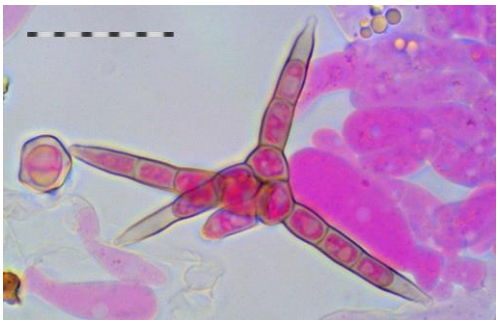

写真 14＊　子嚢菌の星形胞子（KOH 処理）

- 以上のように、きのこには肉眼では見ることのできない多数の生き物が纏わり付いているものと想像されます。わずかな水分でもあれば、水棲の生き物も生存できるようです。
- 特に盤型～椀型の子嚢菌きのこの内側には、種々の生き物が棲息しているものと思われます。ここが本来の居場所なのか、不本意にも迷い込んでしまったのかは不明です。この形状の子嚢菌の胞子は、カバーグラスを盤・椀の上に置いて噴出したものを採取していますが、胞子と一緒に吹き飛ばされた生き物を観察しているようです。子嚢菌の胞子噴出力は大したものです。
- 顕微鏡下では、本来の目的を忘れるほど興味深い風景に出会うことがあります。「異端を攻むるは害あるのみ」と言いますが、せっかくの機会なので、封水が乾かない間に深入りしない程度に楽しむべきであると思います。
- 紹介した生き物の判別については、あまりあてにならないことをご了承ください。ただ、「淡水プランクトンのページ」というＨＰから多大な情報をいただきました。